

2173年、日本 レファレンス

期一

保護区の朝は早い。食堂の集団給食は、夏は5時半から始まる。ご飯とみそ汁をかき込み、人びとは仕事に繰り出す。

山や畑で働く大人に続いて現れるのは、親と離れて暮らす子どもたち。眠い目をこすりながら、先導の先生に従って朝食を受け取り、いつもの席につく。そして、おしゃべりしながら食べ物を口に押し込む。

ただひとり少年だけは、今朝は一言もしゃべらず、黙々と食べ続け、食器を片づけると一番に食堂の外に出た。

食堂は、「センター」とよばれるコンクリートの建物の中にある。センターは、保護区と自由区を結ぶ接点で、食堂の他に、売店や図書室などさまざまな施設がある。

センターから保護区に入ると放射線状に木造住宅が並んでいる。16歳以上の大人に一軒ずつ与えられる賃貸住宅で、まだ寮生活を経験していない12歳以下の子どもは親や里親と一緒に暮らしている。

センターの近くに住むのは足の弱った大人たち。続いて子どもと暮らす大人たち、既婚者、未婚者の順に遠くなっていく。

今年12歳の少年の家は、センター近くの中央にある。少年は誰もいない家に飛び込むと本を手を持ち、外に飛び出した。そして、図書室へ急いで向かった。

図書室はセンターの2階の一番奥にある。保護区で亡くなった人たちの遺品で作られた施設で、6年前、司書が現れるまでは、どこになにがあるのかさっぱり分からず、ただの物置き部屋と化していた。しかし今では、保護区の人びとの憩いの場所となっている。本棚には、小説や写真集、絵本に童話、料理に旅行や地図など、さまざまな本が並んでいる。

少年は図書室の常連で、図書係も引き受けている。本の貸し出しや図書室の掃除を手伝う。

だからいつもは、図書室が開く10時にやってくる。そして、よその保護区から二週間に一度通ってくる司書の老人にこやかに迎え入れられる。

しかし、今日はいつもとは違う。少年は老人と二人きりで話がしたかった。そのためには、開館準備に訪れる老人を待ち伏せするしかない、と昨夜、朝一番の訪問を決意した。

時刻は6時半、図書室の扉はまだ閉まっている。

少年は、老人が何時に現れるか知らない。体力のない少年は、長く立ち続けることが苦痛だった。少年は床にぺたりと坐り込んだ。その姿は彼の悩みを体現していた。

保護区に預けられた12歳以下の子どもは、学業と大人の手伝いが役目。資格は必要ない。しかし大人になれば、資格を得なければならない。

少年は来年の春には工場勤務のため、3年間の入寮が待っている。無事に卒寮できれば、保護区に入る資格を取得できる。

勤労不適格の烙印をおされて卒寮できなかった場合、管理区で保護されて生きることになる。保護を拒み自由区で生きることではできても、二度と保護区に戻ることはできない。

少年は、豊かな自然を愛していた。できることなら保護区に戻りたかった。そのためにはどうしても卒業しなければならなかった。

「国土を保護する」という目的がある保護区では、山を育て、田畑を耕す、あるいは、保護区で暮らす人びとのために給食を作り、掃除をし、育児や介護や看護をするなど、役割を持つ必要がある。

どんな役目につくにしても、保護区の仕事は体力が必要なことばかり。少年は体力に自信が持てなかった。しかし、都市部にある管理区で保護されて生きなければならないほど弱くもなかった。すると少年に残された場所は自由区しかない。

自由区で生きていく。

少年はどうしてもそう決心することができなかった。お金なしには暮らせない世界は、希望より不安を呼び起こした。

給食センターで働く里親の女性に悩みを打ち明けても、「大丈夫、なるようになるから」というばかりで、どんな風になるのか分からなかった。

学業は中くらい、勤労は落第ギリギリの少年にとって、本を管理する司書という仕事は唯一の希望だった。だから老人がどんな風に司書になったのか、自由区でどんなことをしたのか、知りたくてたまらなかった。

コツコツコツ。

少年の尻に床から振動が伝わって来た。時刻は8時。少年は立ちあがり、老人が現れるのを待った。

「あの、自由区ってどんなところですか。教えてください」

少年は深々と頭を下げた。老人の黒い革靴が目に入った。

「リファレンスの依頼かね」

顔をあげた少年の目に、白髪頭の老人の笑顔が飛び込んだ。

「本当は順番があるんだが、なにやら急いでいるようだから今から調べてあげよう。中に入りなさい」

老人は、図書室の鍵を開けると少年を招き入れた。

02給食制度

図書室の中は、二週間前と変わらず整然と本が並んでいた。しかし少年の目にはまるで違う世界に見えた。人気のない図書室は静かで、自分の心臓の音が耳に響いた。鼓動にあわせて、本棚が伸び縮みするような錯覚に襲われた。

老人は近くの椅子を手で示し、座るように促した。少年は言われた通り席についた。

「保護区とは、全体で一つの財布を持って、融通し合って暮らす世界。自由区とは、一人一人が別々の財布を持って、自由に選択できる世界。教科書ではそんな風に語られている。しかし、お前さんが知りたいのは、そんな話じゃないだろう？」

老人は少年に問いかけた。少年は、静かにうなずいた。

「おそらく、この国の歴史を知ることが、鍵になるだろう。地図から攻めるという手もある。さて、どうしたもんだろう」

老人は少年の手にある本を見た。

「それは横浜の旅行ガイドだね。自由区について、もうお前さんなりに調べたということか。では、保護区の特徴である給食制度の話から始めよう」

老人は、棚から一冊の本を手にとると少年に掲げて見せた。表紙には「現代史1」と書かれていた。

老人はペラペラと本をめくりながら語りだした。

「誰もが健康で文化的な生活ができるように、かつては働けない人にお金を配っていた。しかし、経済不況に陥り、働きたくても仕事がない人もお金で保護するようになった。すると金額がはねあがりまかないきれなくなってしまった。あるいは、働いた人より生活保護の方が収入が多いという問題が起きてしまった。どんな状況か想像がつくかね？」

少年は首をかしげた。

「そもそもお金があっても年老いて買い物に行けない、料理が作れないという問題もある。作れば足りるお金も、買えば高くして足りなくなる。そんな問題をどう解決するのか。政府が介入すべきことなのか、いろいろな議論が持ち上がった。そんな経緯がこの本には書かれている」

老人は、少年に本を手渡した。

「結局は集団給食制度という形に落ち着くのだが、食事の世話から解放された女性たちの自立を促す結果にもなった。君の里親が女性でも、仕事を持って自立しているだろう？」

少年は静かにうなずいた。

「はい、給食センターで働いています」

老人は、少年の隣に腰掛け、少年の肩に手をおいた。

「昔は、仕事を持っていても、家の中の仕事は女性がするものという伝統に縛られていた。しかし今は違う。自由区でも、保護区でも、家事は分担して行う。実際、わたしたち夫婦もそうだった。料理は妻、掃除はわたし、洗濯は手のあいた方というのが暗黙のルールとなっていた」

「僕も家の手伝いをしています。洗濯物をたたむとか、簡単なことだけですけど」

「それはいい心がけだ」

老人は立ちあがり、「現代史2」と書かれた本をとりだした。

「いいかい、最低の暮らしとはどんなものなのか、それを体現したのが保護区の生活だ。もちろん、最低と最悪は違う。保護区の暮らしが悪いわけではない。基本となる暮らしと言い換えた方が分かりやすいかもしれない。誰でも得ることができる生活、平等な暮らし、それが保護区を形作っている。働きさえすれば、確実に食べられる。どう生きるか悩まなくてもいい」

老人はペラペラと本をめくり始めた。

「しかし、よいことばかりではない。誰でも同じ食事を同じだけ食べられる権利を手にした代わりに、好きなものを好きな時間に食べる自由を失った。気にならない人もいれば、受け入れがたい人もいる。お前さんはどっちだ？」

「考えたことはありません」

「不満はないわけだ。いいことだ。この先、選択の幅が広がる。つまり生きやすいということだ」

老人は少年に2冊目の本を渡すと再び静かに語りだした。

「仕事には就業時間というものがある。だから仕事の時間に合わせて起床し、食事をとる。時間の自由は意外とない。用意する手間を考えると内容の自由も意外とない。しかし、休日に好きなものを食べることも、食べないで眠り続けることも、自由区なら自由に選べる。また創作活動を仕事とする人の中には、仕事の区切りで食事を取りたい人もいる。わたしのような日曜詩人は空いている時間に創作するだけで十分だが、仕事として金をとるようになればちがってくるのだろう。職業詩人の多くは自由区で暮らしている」

「でも、司書さんはずっと自由区で暮らしてきたのでしょうか？」

「そうだ。妻が亡くなるまで、料理専門の私立図書館の司書として働いてきた」

「今は好きなものが食べられなくなって、不満はないんですか？」

「お前さんの里親同様、わたしの妻も料理人だった。結婚当初は自由区の有名なレストランに勤めるシェフだった。結婚して以来、そんな妻の手料理を食べ続けてきた。本当においしくて、食べるたびに静かな幸せを感じていた。しかし、妻は亡くなってしまった。食事のたびに妻との思い出がよみがえって、わたしは悲しみに沈んだ。そんなわたしを心配して、上司から保護区で司書として働くことをすすめられた。妻亡き今、わたしが食べたいものは永遠に失われてしまった。そんなわたしにとって、選択の余地のない保護区の食事は意外に心地よかった。選ばなければ考えない。考えなければ、喪失感を感じなくてすむ」

「では司書さんも不満はないんですね」

「そうだ。食事は、選びたい時に選ぶのは楽しみだが、選ばなくてはならなくなると苦しみに変わる。いっそ一方的に与えられた方がいい。だが、お前さんとわたしでは状況が違う。図書室で借りた旅行ガイドを見て、食べたいものや行きたい店が見つからなかったかね？」

「僕は与えられることになれているので、どう選んでいいのか分かりません。でも、美味しそうだと思います」

「ならば、行って食べてみることだ。食べるためだけでも自由区で暮らしてみる価値はある。自

由区とは、食事の自由を楽しむところといえるのだから」

そうって老人は少年を励ました。

「でも僕、保護区で司書になりたいんです。どうすればなれますか？」

少年は老人に問いかけた。老人は答えた。

「わたしのケースはイレギュラー。保護区の仕事に司書というものはない。なろうとしてなれるものではなく、必要にせまられてたまたまわたしが招かれたただだ。しかも数か所引き受けてやっと一人前だ」

「僕には無理ということですか？」

「そうじゃない。卒寮後、高校、大学と進んで必要な単位をとれば司書の資格は取得できる。問題はその後だ。司書は、資格取得者に比べて、求人は驚くほど少ない。就職が困難なんだ。なんとか就職できたとしても、給料の安さに嫌になってやめていく人も多い。それらすべてを乗り越えたとしても、保護区に戻って司書になれるかどうかはわからない。わたしが死ねばわたしのポジションはあくが、ほかにも希望者ができるかもしれない。外から招かず、保護区の誰かが兼任するかもしれない。どうなるにしても保護区で司書になれる可能性は限りなく低い。それでも目指したいかね？」

「分かりません。でも本が好きだし、図書系の仕事も好きです。なにより他に保護区でできそうなことがないんです。保護区で司書が無理なら、僕はどうしたらいいんでしょうか？」

「なぜ保護区で働くのは無理だと思うのかね？」

「僕、学業は中くらい、勤労は落第ストレスなんです。体力がなくて、いつも最初にへばってしまう。司書も体力がないとだめですか？」

「ないよりあった方がいいだろう。本は一冊なら軽いが、数冊まとめて持つと案外重いものだからね。もし体力を必要としない仕事を探しているなら、司書ではなく、自由区で自由度の高い仕事を選んだらどうだろう」

「僕にできることがあるでしょうか？」

老人は言葉を探して沈黙した。そして、真剣な少年の目を見つめ返すと静かに語りだした。

「大昔は、身分によって世界が分けられていた。家の仕事を継ぐ以外、選択の余地はなかった。しかし、だんだん自由化され、あらゆることが選択可能になった。なるべきものではなく、なりたいたいのものを目指せるようになった。解放された当初は、自由にさえなればなにもかもうまくいくと信じられていた。しかし、実際は悪くなる一方だった。成功する人もいれば、当然、失敗する人もでてくる。彼らは低所得者として、社会の底辺で生きるしかなくなってしまう。事態は個人の力ではどうにもならないところまで悪化していった。そこで暮らしの上限を決めて、みんなで支え合う平等な社会を新たなセーフティネットとして用意した。保護区の誕生だ。自給自足を旨とし、国土を保護するための組織として、人里離れた山間部に配置された」

「歴史的な大転換だったと授業で習いました」

「その通り。自由区と保護区、二つに分かれたことで生き方の選択肢が広がった。しかし、変わらなかったこともある。なにか分かるかね？」

「分かりません。なんですか？」

「生徒として勉強することと、職場の一員として働くことは違うという問題だ。勉強ができたからといって仕事にできるとは限らない。向かないと分かった時の挫折感は勉強に費やした時間が長いほど大きい。やり直せないケースもでてくる」

「どうすれば解決するんですか？」

「いいかい、大学で単位をとれば司書の資格はとれる。しかし、就職できるとはかぎらない。運よく就職できたとしても、お客と接することが苦手なら、仕事として続けることは難しい。またどんなレファレンスにも答えられるように、本はもちろん、ネット上にある文章にも精通しなければならない。専門分野を持つことも必要になる。勉強に終わりはない。調べるという行為は同じでも、対象は広がっていく。その過程で行き詰ることもあるだろう。しかし、目標を変えないで熟練していくことと、見切りをつけて新しい仕事に挑戦することは両立できない。どちらか一方を選ばなければならない。もし、途中で投げ出してばかりいて何も身につかなかったらどうなると思う？」

「困ると思います」

「その通り。若い間はアルバイトで食いつなぐことができるかもしれない。しかしアルバイトのままではいつ解雇されるか分からない。病気になれば収入も減ってしまう。生計が立てづらい。それでも生きていかなければならないし、国としても生きていけるように働きかけなければならない。しかし、自己責任を要求したところで、問題が解決するわけではない。救いとなる制度が求められる。そこで考えられたのが、子どもの間に職業体験を積ませる今の制度だ。いざとなったら保護区に戻ればいい。そういう安心を作りだしたんだ」

老人は一呼吸置くと、一気に語りだした。

「一番欲しい人材は、自由区で起業する若者だ。自由区で存分に経験を積んだ人材が、年老いて保護区の自治を受け持つ。そんな回遊型の人生が理想とされている。一番避けたいのが、社会的な責任や義務を果たさず、他人や制度に寄りかかって生きることだ。そこで親との縁を断ち、子どものうちに基礎となる農業・林業・工業の労働体験を積ませることにした。農業・林業は、見聞きすることや手伝いを通して体にしみこませて行く。工業は、3年間の寮生活を通してイメージをつかむ。勉強してから働くのではなく、働いてから勉強するように変えたのだ。なぜそんなことをするかといえば、向いてないと分かっててもやり直せるようにするためだ。いいも悪いも、経験してみなければわからない。経験すれば、目標にすることも、絶対嫌だと反発することもできる。どんな形にしても、お前さんのように幼いうちから自分の将来について具体的に考えるようになる。生計という問題から逃げ出さずとり組ませることこそが狙いなんだ。逃げ出せば救いのない底辺の暮らしが待っている」

「でも僕、どうすればいいのか分からないんです」

「答えは、体験を重ねるうちに自然に導き出される。図書館が無理でも、本屋に就職できるかもしれない。あるいは、自分が本屋を開くかもしれない。自由区で何者にもなれなかったとしても、卒寮さえしていれば、郷土の一員として保護区で生きることができる。心配はいらない。なんとかなるもんさ」

老人は少年を安心させようとした。しかし少年は納得しなかった。

04子ども時代

「大人はみんなそういいいますね。でも僕は今知りたいんです。司書さんはどうだったんですか？」

少年は老人に訴えた。

「わたしの身の上話を知っても、お前さんの役には立たないだろう」

「そんなことはありません。小さいころどんなだったのか、これからどんなことが待っているのか分かります」

「大ざっぱに言えば似たような流れを持っているかもしれない。しかし、能力も条件も違って
いる。参考になるとは思えないがね」

「どんな気持ちで暮らしてきたのか知りたいんです。将来に不安はなかったんですか？」

「不安はあったさ」

老人は、鞆を開けると小さな本をとりだした。

「かわいいだろう。わたしの両親が作った豆本だ」

「見てもいいですか？」

「もちろんだ」

老人が豆本を手渡すと、少年は表紙を眺めた。豆本はかなりくたびれていた。角は擦り切れ、ところどころ破れていた。ページをめくると左手に動物のイラスト、右手にひらがなが描かれていた。

老人は少年から豆本を受け取り、語り始めた。

「わたしはこの豆本が好きで、いつも持ち歩いてきた。あまりに何度も開くのですぐにぼろぼろになり、何度も作り直してもらった。しかし両親が亡くなった今では、めったに開かず、大切にしまっている」

「両親との大切な思い出の品なんですね」

「そうだ。わたしの両親は本屋を経営していた。昔は、本屋といえば紙の本を棚に並べて売るのが多かったが、電子データが一般化した今では予約注文しなければ手に入らない。全自動印刷機で作っても、手製本しても、電子データに比べてかなり高額になる。それでも根強い人気に支えられて、本屋は生き残った」

「でも、ネットでも注文できますよね？」

「もちろん、本屋に頼まなくても本は買える。しかし、膨大な量の本の中から、目的にあった一冊を選ぶのは相当調べなければ難しい。特にプレゼントを選ぶ時には相談者が欲しくなる。うちは手製本も手掛けていたから、写真や手書きメモなども挿入出来て結構人気があった。裕福ではなかったが、それなりに充実した生活を送っていた」

「僕の父親は自由区でサラリーマンをしています。だから自由区に出ても継ぐべき仕事はありません。司書さんは、どうして本屋を継がなかったのですか？」

「わたしは手先が不器用で、手製本を手がける自信がなかったんだ。この世で一つだけの本を作るから商売として成り立っていただけに、子ども心に仕事にするのは難しいと思ったよ」

「でも本は好きだったんでしょう？」

「ああ、好きだった。小さいころから両親がいろんな本を読ませてくれたから、司書になったあとで大いに助かったよ。有名な本の作者とストーリーはだいたい覚えていたからね。たいていの相談には自信を持って答えることができた」

「まるで将来司書になるために本を読んでいたみたいですね」

「目的も無くただ続けていたことが仕事になるという話は結構多い。だから、何をしても大丈夫だと大人は思う訳だ。心配なのは疑問を持たず、心配もせず、何もしないことだ。しかし、そんな子どもはなかなかいいないもんさ。みんな何かしら夢中になることがある。暇つぶしでは何も生まれないが、真剣にとり組めば何事か残るものだよ。だから自由に育てる。そして、そんな風に自由に育てることを選んだ地域が保護区なんだ。しかしすべてが同じじゃない。地域によって微妙な違いがある。保護区に入る時期もまちまちだ。お前さんはいくつでこの保護区に来た？」

老人は少年にたずねた。

「7歳の時です」

「わたしも7歳で両親と離れて保護区に入った。寂しくなかったかね？」

「離れるまでは不安で仕方ありませんでしたが、里親がいい人だったので、住み始めてからは初めてのことばかりでワクワクしました」

「そうか。わたしは里親になかなかねれず、本の世界に逃げ場を求めて、部屋の片隅で小さくなっていったんだ」

「学業や勤労に参加しなかったんですか？」

「もちろん参加した。逃げ出す勇気もなかったからね。でもただいるだけで、参加しているとはいえない状態だった。しかし親から離された多くの子どもたちは似たような状態だった。慣れているのか、大人たちは何も言わずに待ってくれていた。時間が経つにつれて一人、また一人と村の子どもに変わっていった。一年が過ぎたころには、わたしもすっかり新しい暮らしになれていた。"親離れ"という最初の試練を乗り越えたわけだ」

「僕も最初の試練を乗り越えたわけですね」

「その通り。わたしよりずっと優秀だ」

老人は少年を褒めた。

「制度としては、13歳から15歳の間寮生活をするだけでいい。しかし、いきなり親元を離れて仕事と勉強の両立をはかることは難しく、脱落者が続出したため、集団生活に慣れることから始める家庭が増えた。その行き先として、農業・林業の労働体験を積むことができる保護区が選ばれた。また具体的な目標が決まらない時は、とりあえず勉強するのが一番確実という考え方は昔から根強く続いている。実際、専門分野を持たないなら、何事にも対応できるように幅広い知識を持つ方が有利に違いない。そして幅広い知識を植え付けるためには幼いころから教え込む方がいい。一年、また一年と繰り返して、今では3歳で手放す親も多い」

「ここではみんな7歳から入ります。3歳からだなんて、受け入れ先があるんですか？」

「ある。教育に活路を見出した保護区だ。人口が増えると補助金も増える。親から寄付も入る。」

そのお金を村の運営費にあてることで、不作や凶作を乗り切る」

「保護区は国土保護法で守られていて、何の心配もないんじゃないんですか？」

「国土保護法は弱者保護のための法律ではないんだ。簡単に言えば、自然環境を守るためにさまざまな規制を受けるかわりに、安定した生活環境を提供するというものだ。禁止事項はあるが、細かい運営の仕方は自分たちで決めることができる。たとえば、野菜や米の余剰生産分を市場に売り出して運営費として使用することもできる。自由区との大きな違いは、野菜や米を作った人だけに還元されるのではなく、それを支える職業を担う人たちにも還元される点だ。常に個人ではなく集団に還元される。もちろん、失敗の責任も集団に課される。だから個人の意見より集団の意見が尊重される。しかし自由区なら一人で責任を負う代わりに、一人で決定することができる。そこが最大の違いだ」

「決定の仕方の違いが、そんなに大きな問題なんですか？」

「決定の仕方というより、住民が決定権を持っていることが大切なんだ。自由区では、どこに住んで、何を着て、何を食べるか、すべて自由に選べる。ところが、保護区では自然保護を最優先するため、自由には選べない。居住区は限られているし、着るものは配給される。食べ物も地産地消が基本となる。しかし、自作した野菜に限定されれば、同じものを食べ続けなければならなくなる。バランスの良い食事を用意するためには、交換や売買など工夫が求められる。何を売って、何を食べるか、また、何を買うのか、それらを決定する権利は住民に与えられている。基本的には習慣に従うが、意見が出れば村人の多数決で変えられるところが多い。また、また頑張っても、頑張らなくても同じなら、頑張る意味を見いだせない。優秀者に賞品を出すなど、停滞しがちな気分を一新する工夫も求められる。大浴場など新しい設備を整えたり、集団で地方都市に慰安旅行に出るなど気晴らしのために使われることも多い。凶作の年も例年通りの食事を用意するために使うところもある。要するに住民に決定権があるから、自分たちがしたいことをする自由があるということだ」

「春と秋に行われるお祭りも工夫の一つなんですか？」

「自給できないものを用意するためにはお金が必要だ。この村の祭りを知らないから詳しくは分からないが無関係ではないだろう」

少年は祭りの費用がどこから出ているかなど今まで考えたことがなかった。保護区の意外な一面を見た気がした。

「教育に話を戻そう。生まれたばかりの子どもは何もなく、真っ白な状態だ。そこから夢を実現するためには段取りが必要だ。しかし最初の段取りは本人には選びようがない。親が決めるしかない。もし子ども自身が決める自由を残したいのなら、どんな才能が眠っているか分からない以上、どんなことでも役立つような道を選びたい。つまり勉強させるということだ。だから小さいうちから知識を詰め込む。しかし、詰め込み式の教育が合わない子どももいる。そんな子どもは、自分の興味を掘り下げていける自由な雰囲気のある保護区に転入することになる」

「最初から自由な雰囲気のある保護区に入った子どもは将来なれるものが限られるんですか？」

「確かにエリートコースをたどることは難しくなる。しかし、働く中で興味を持つ分野ができて、勉強に目覚める子どもも多い。独学で頑張るのは大変なことだが、夢があれば不可能ではない

。お前さんにも司書になりたいという夢があるだろう。その夢があれば、勉強に励む理由ができる。何の目標も無いよりは頑張れると思うがね」

老人は優しく少年を促した。

「今、僕にできることは授業を受ける以外ないのでしょうか？」

老人は少年に答えた。

「もちろん授業は大切だ。しかし教科書で習うことだけが勉強ではない。すべてが糧になる。想像してごらん。教科書で田植えがどんなものか知ると、体験した上で授業で習うのでは情報量がまるで違って来る。悔しくて泣いた経験も、他人の体験を理解する上で重要な役割を果たしてくれる。無駄なことは何もない。すべてがリファレンスの答えになる可能性を秘めている。だからあらゆることに敏感に反応する柔らかい心を育てることこそが勉強なんだ。対象はなんでもいい。まずは心から興味を持てることを持つことだ」

「司書さんは僕くらいの年に何に興味を持っていたんですか？」

「わたしは有名な小説の読破に熱中していた。意味の分からないところは辞書を引いて、繰り返し何度も読んで理解を深めていった」

「僕も辞書を引くのは好きです」

「それはよかった。辞書はレファレンスの基本アイテムだからね」

老人は少年を見るとゆっくり語り始めた。

「昔は、勉強して知っていることを増やせば選択肢は増えていくと考えられていた。しかし、実際は逆なんだ。目標をもてば偏りができて、関わりのないことは選ばなくなっていく。目標を定めず何にでも通用することばかり選んでもやっぱり偏りが出る。簡単に分かることしか知らないという状態に陥ってしまう。そこから抜け出すためには、時間をかけて一つのことを学ばなければならなくなる。もしまんべんなく詳しくなろうとすれば、膨大な時間と経験が必要になる。それこそ不眠不休で臨まなければならなくなる。そんな無茶なやり方で達成できるのは、一部のエリートに限られている。誰でも当てはまるやり方ではない。だから決断が重要になってくる」

「でも僕はどう決めていいのか分かりません」

「難しく考えることはない。お前さんの司書になりたいという気持ちもひとつの決断だ。しかし望んだことではなく、行動したことが未来を決めていく。だから決断に空白はない。意識する・しないに関わらず、常に次々決定し続けている。そしてお前さんは既に一歩踏み出している。わたしのところに聞きに来ているだろう」

老人は優しく少年に笑いかけた。少年は静かにうなずいた。

「寮生活はどんな感じだったんですか？」

少年は老人にたずねた。

「寮生活は、保護区からバスに乗って管理区にある寮に行くことから始まる。到着するとベッドと机のある個室が与えられる。風呂とトイレと食事は共同だ。部屋割が終わると翌日入寮式が行われる。入寮式には2、3年生が選んだ音楽家が自由区から来る。彼らは自由区代表者として、自由区の魅力を伝える役割を担っている。最高の演奏を聞かせてくれるだろう。わたしの妻は大ファンになったそうだよ」

「司書さんはどうだったんですか？」

「わたしも思い出の一曲として胸に残っている。今でも時々頭の中を流れる」

「入寮式の後はどうなるんですか？」

「入寮式が終わると仕事の割り振りが決まり、工業勤務が始まる。最初は誰もがラインについて商品製造の一端を担う。3カ月くらいすると求人案内が回ってくる。応募して合格すれば担当が変わる」

「司書さんは何になったんですか？」

「わたしは文字を扱う仕事がしたいと考えていたので、データ管理に応募した。なんとか合格して、毎日数字と向き合う日々が始まった」

「卒寮までずっと同じ仕事に就いていたんですか？」

「そうだ。よほど問題がなければ変わることはない。そして、卒寮で最後の選択をする」

「最後の選択？」

「自由区に出るか、保護区に戻るか、意志表示するのだ」

「卒業するころには、すでに就職先は決まっているのでしょうか。宣言する意味があるんですか？」

「意味はある。一人前の大人として、自分のことを自分で決める権利を得ることで、親の干渉や保護区の独裁を防ぐことができる」

「でも準備したものを放り出して、いきなり行き先を変えて困らないんですか？」

「わたしの妻は最後の最後で行き先を変えた。保護区行きをやめて、自由区に出ると宣言したんだ」

「どうして急に変えたんですか？」

「妻は保護区生まれの保護区育ちだ。両親とも保護区に住んでいて、自由区に出た経験はない。だから当然、妻も保護区に戻るものだとな人も周囲も思っていた。ところが、入寮式で自由区で活躍する音楽家のステージを見て、自由区に興味を持ってしまったんだ。しかし周囲の期待も、これまでの計画もある。簡単には行き先を変えられない。誰にも言えずに苦しんだそうだよ。迷いに迷って、最後の最後で自由区に行きたいと言ったんだ」

「どうなったんですか？」

「住むところも仕事もなにもない。お金もわずかしかない。そんな状態で自由区に放りだされて

、妻が最初にしたことはなんだと思う？」

「分かりません。なんですか？」

「町中を歩きまわって、一番食べたい店で食事をしたんだ。そして、その場で弟子入りを申し込んだそうだよ」

「雇ってもらえたんですか？」

「ああ、寮で3年間給食係をしていた証明書が役に立った」

「よかったですね」

「本当だ。仕事が見つからず、保護区に戻っていたらわたしと出会うことはなかったのだから」
老人は少年に微笑んだ。そして、再び語りだした。

「親元から離れて、保護区で育った子どもたちは、寮生活になれるのも早い。掃除や洗濯も楽々こなせる。問題は自由区で親と暮らしてきた子どもたちだ」

「保護区に入らない子どももいるんですか？」

「もちろんいる。理由はさまざまだが、商売を継がせるため、店の手伝いをさせるという理由が多い。彼らの多くは身の回りの世話を自分ですることも初めてなら、決まった時間に決まった食事をとることも初めてだ。みんなで風呂に入ることも初めてだ。ストレスがたまって体調を崩す子どもも多い。なかには脱走を試みる子どもでてる」

「逃げ出すとどうなるんですか？」

「入寮した時点で、半人前扱いされる。つまり、自分のことを自分で決める権利を持っている。一応は捜索するが、逃げ出したことがわかれば連れ戻されることはない。保護区に入る資格を失うだけだ」

「でも、自由区に出ても、卒寮証明書がないと就職が難しいんでしょ？」

「その通り。逃げ出せば厳しい未来が待っている。それでも、自分のやり方で未来を切り開く子どもがゼロというわけではない。集団行動が苦手なだけで、才能に恵まれている子どももいるからね。わたしの同級生にも、寮から逃げ出して自由区で成功した子がいたよ」

「でももし失敗したらどうなるんですか？」

「無法地帯でその日暮らしをすることになるだろう」

「無法地帯？」

「自由区で意見を言うためには、税金を払って発言権を買う必要がある。当然、お金持ちが政治に関与することになる。貧乏人は自分自身を駒として、どこに身を置くかで意思表示をすることになる。支配権を得たお金持ちも、人が減っては運営が成り立たなくなるため、貧乏人をそれなりに大切にする。商売をしていて自由に行き来できない人たちは、仲間を集めて政界に代表者を送り込んで自分たちの要望を通そうとする。金持ち、貧乏人、商売人という三つの勢力が自由区の表の世界を形作っている」

「表の世界？」

「そうだ。法が支配する明るい世界だ。110番に電話すれば警察が来てくれる。119番に電話すれば救急車や消防車が来てくれる。人が人を見守る明るい世界だ。殺人や泥棒は罰せられ、ルールを守ることが利益につながる」

「そうじゃない世界があるんですか？」

「ある。それが無法地帯と呼ばれる裏の世界だ。欲望と暴力が支配する恐ろしい場所だ」

「どうしてそんな場所を残したんですか？」

「墮落する自由を残す為だ」

「どういう意味ですか？」

少年は息を詰め、老人をじっと見つめた。老人はゆっくり語りだした。

「一人が一人を助けることは大変だが、全体で一人を助ければ小さな負担で済む。つまり、福祉が成り立つのは、多く的人是助けるだけで助けられることがないからだ。何事もなかったことを幸福として不満を持たずに生きるから、相互扶助が成り立つ。ではもし、助けられることを当てにして、働くことをやめってしまう人が増えたらどうなると思う？」

「うまくいかなくなると思います」

「その通り。健康で働けることをよいことだと考え、実際に働くから制度として成り立つ。また考え方を共有しているから、よい・悪いがはっきりして、助ける側と助けられる側のバランスもとれる。もし、同じように考えることができず、同調できなかつたら、そのまま仲間にしておくことはできない。しかし、例外なく国民全体を対象とする制度では、追い出す先もなければ、逃げ出す場所もない。対立したまま暮らし続けるしかない。そこで考え出されたのが、無法地帯を容認することだ。習慣を変えることができないなら、保護区でも、自由区でも、集団の一員であることは苦痛でしかない。逃亡する自由こそが救いになる」

「でも、逃げ出した先には何もありませんか？」

「そうだ。守ってくれるものは何もない。自由とは本来そういうものだ」

「何もないところで、どうやって生きていけばいいんですか？」

「その問いに答えられるものだけが無法地帯で勝ちあがり、暴力を駆使して、欲望を操ることができる」

「自由って残酷なんですね」

「墮落する自由を認めない方がずっと残酷だと思うがね」

「なぜ？」

「死ぬ自由を認めなければ、命をかけて挑戦することはできないからだ。どん底から這い上がるチャンスを得られない」

「僕はそんなキリキリの生き方は嫌です」

「わたしも遠慮願いたい。だから習慣に従い、法律を尊重する。多く的人是そうするだろう。しかし、脅されなければ動かない人が自ら法律に従って暮らすことは難しい。意のままに従わせたい人も、法律のある暮らしは向かない。そうしてはじき出された人たちが向かう先には、福祉とは無縁の世界が待っている。成功しても、失敗しても、それはその人の責任。死んでも、殺しても罪に問われないかわりに、いつ殺されるか分からない世界。弱いものは自由を失い虐げられる」

「なんて厳しい世界なんだろう」

「ああ厳しい。だが、勝てば思い通りに生きられる。憧れるものは後を絶たない」

「自由区に行くのがますます怖くなってきました」

「法が支配する明るい領域にとどまる限り、そんなに怖がることはない。自分から近づかなければ、縁のないまま一生を終えるだろう」

「そう言われても無法地帯を抱える自由区は怖い。僕は保護区で暮らしたい」

「保護区でも戦いはある。自然との闘いだ。雪、霜、台風、洪水、地震に山崩れ、数え上げればきりが無い」

「でも僕は人と争うより、自然と闘う方がいい」

「それも一つの考え方だ」

老人は少年にうなずいてみせた。

「卒寮してからどうしたんですか？」

少年は老人に訪ねた。

「奨学金を得て、高校・大学と進学した。親元には戻らず、アルバイトをしながら勉強した」

「大変じゃなかったですか？」

「寮でも進学のために勉強してきたから、苦にならなかった。むしろ楽しみですらあった」

「司書になるためだから？」

「いや、司書になろうと思ったのは大学2年の時だ。しかしたいの学生は、在学中に取得できる資格はなんでもとろうとする。司書もその一つだ。わたしも一応単位をとっていた」

「どうして急に司書になろうと思ったんですか？」

「アルバイト先に、料理専門の私立図書館があったんだ。年会費を払えば何度でも自由に入出りできた。苦学生のわたしにとって図書館は唯一の娯楽になった。いろいろな食べ物の写真を見て、働き始めたら必ず食べようと心に誓ったものだ。そのうちアルバイト募集の張り紙が出た。時給は安かったが、本に触れられる仕事ならと応募した。無事に合格して、どんな質問にも瞬時に答える姿を見て、これこそわたしが求めている仕事だと思った。その後、運のよいことに、アルバイトから正式に社員として採用され、保護区に戻るまで勤め続けた」

「やめようと思ったことはないんですか？」

「ある。アルバイト時代に妻と出会って恋に落ちたが、社員に採用されても給料が安すぎてなかなか告白できなかった。仕事にはやりがいを感じていたが、将来を思うと転職した方がいいのではないかと思ったもんさ」

「でも結婚できたんでしょ。どうやって解決したんですか？」

「自由区には、表の世界と無法地帯の間に歓楽街がある。映画や舞台など、さまざまなエンタテインメントが揃う誰もが楽しめる地域だが、危険な無法地帯と隣り合わせなため、女性一人ではなかなか足を運べない。ところが妻はどうしても入寮式で見た音楽家の舞台が見たかった。しかし、仕事仲間と一緒に休めない。困った彼女は、図書館で顔見知りになったわたしに声をかけてきた」

「引き受けたんですか？」

「もちろん、引き受けた。友達に服とお金を借りて、先輩には歓楽街の美味しいお店を紹介してもらって、嬉しさいっぱいで出かけて行ったよ。音楽が鳴り続ける間、わたしは夢中で舞台を見守る妻の横顔を見続けた。幸せだった。妻の側にいられることがなにもものにも代えがたい幸せだった」

老人は目を閉じると天井を仰いだ。

「今でも、彼らの曲を聞くと若かりし日の妻の横顔が思い浮かぶ。妻だけでなく、わたしにとっても特別な曲になった」

「告白したんですか？」

「告白した。先輩が選んでくれたお店は、若いわたしたちにぴったりのリーズナブルなお店だ

った。わたしたちは大いに食べ、語った。そして妻がどんな人生を歩いてきたのか知ったんだ。何度か料理のリファレンスを受けていたので、料理人を目指していることは知っていたが、両親とも保護区にいることはこの時初めて知った。最後の最後に自由区行きを決めたことも初めて聞いた。思い切りの良さは妻の美点だが、まさかそんな旅立ちをしたとは、本当に驚いたよ。わたしも思い切って結婚を前提に付き合っしてほしいと申し込んだんだ」

「奥さんはなんて答えたんですか？」

「イエスとは言ってくれなかった。しかし、ノーでもなかった。修行中の身だから、恋愛は考えられないと断られたんだ」

「どうしたんですか？」

「何もしなかった。しつこくして嫌われるのが怖かった。図書館に来なくなるのではないかと心配でならなかったが、ただ待つことしかできなかった。しかし、彼女は来てくれた。付き合ってくれたお礼にと、手料理を持って訪ねてくれたんだ。嬉しかったね」

「友だちになったんですね」

「まあそんなところだ。妻の料理人修行が終わるまで、返事を待つことにしたんだ。幸い、わたしはリファレンスを通じて妻の仕事を手伝うことができた」

老人は鞆から一枚の写真を取り出した。少年が覗きこむと、お皿に盛られた鶏肉料理が写っていた。

「これは、妻が料理修業を終えるために作った、オリジナル料理だ。鶏肉の黒酢あんかけだよ」

「美味しそうですね」

「もちろんうまいさ。二人でいろいろな本を調べて、試作を重ねて作りあげた料理だ。見た目は地味だが、素材本来の味を楽しめる。鶏肉の下処理が味の決め手だ」

老人は写真を眺めた。

「この料理で晴れて一人前の料理人になった時、妻がわたしに"これはわたしたちの作品よ"と言ってくれたんだ。その言葉を聞いてわたしは改めて妻に求婚した。妻は快く承諾してくれたよ」

「うまく行ってよかったですね」

「ありがとう。わたしにとってこの世で一番の幸せな出来事だったよ」

老人は艶やかに微笑んだ。

「結婚が決まって、それからどうなったんですか？」

「新婚旅行に博多に出かけた」

老人は棚から日本地図を取り出した。

「ちょっとこの地図をみてごらん」

少年は地図を覗きこんだ。老人は地図を指差し語り始めた。

「お前さんも電車に乗ってみれば分かるのだが、駅から離れた広い場所には農地や工場など、その地域の主要産業が密集している。働く場があるということだ。わたしが暮らしていた横浜の場合、海沿いに工場が密集している。工場の隣には、工場で働く人びとの家がある。家の中心には駅があって、商店街や病院や図書館など、人が暮らす上で欠かせない施設が集まっている。駅と駅は線路で結ばれ、移動の自由を確保している。何が言いたいのかといえば、都市生成にはパターンがあるということだ。授業で習っただろう？」

「はい。保護区と接する小さな都市を国内都市とよび、海外と接する大きな都市を国際都市と呼ぶ。国際都市は、東京、横浜、名古屋、大阪、博多の5つで、海と空の玄関になっている」

「その通り。無法地帯があるのは、5つの国際都市に限られている。他はみんな強制移住させられ、つぶされた」

老人は戸棚から本を取り出した。背表紙には「マザーの半生」と書かれている。

「これは、博多の駅裏にある無法地域に住むマザーの半生が書かれた小説だ。お前さんも名前くらいは聞いたことがあるだろう」

「有名な占い師だったと思います」

「その通り。マザーは水炊き屋や宿屋も経営していて、海外からも著名人が数多く滞在している。滞在者の中には作家もいて、マザーの半生をこの小説にした」

老人は少年に本を手渡した。

「妻は水炊き、わたしは小説の舞台に心惹かれて、博多行きを決めたんだ」

「無法地帯に泊まったんですか？」

「泊まった」

「怖くはなかったんですか？」

「怖くはないさ。誰もが肩書きを忘れて、自由に交流できる場所。それがマザーのサロンだ。建物は古い民家だが、料理は素晴らしく、町には活気があって誰もが笑顔だった」

「でも、無法地帯は殺しても、殺されても自由な恐ろしい場所なんじゃない？」

「無法地帯といっても、一様ではないんだ。集まった人によって、さまざまな形になる」

「どう違うんですか？」

「保護区も、管理区も、自由区も、法律を頂点とし、代表者が運営を行っている。しかし、無法地帯の多くは、個人が支配している。つまり、支配者に気に入られれば、底辺から一気に抜け出すチャンスがあるんだ。半面、ちょっとした理由で疎外される可能性も持っている」

「法律よりも人なんですか？」

「そうだ。支配者次第で天国にもなれば、地獄にもなる。マザーは地獄で生まれて、天国をつかった。わたしたち夫婦にとって、親同然の恩人だ」

「マザーと知り合いなんですか？」

「新婚旅行で出会って、つき合いが始まった。マザーの話をする前に、無法地帯の歴史を話してあげよう」

老人は棚から本を取り出した。背表紙には「無法地帯の歴史」と書かれている。

「保護区による救済が実施された当初、河川や公園には行き場を失った人びとが暮らしていた。彼らの多くは、保護区や管理区行きを承諾し、移住した。しかし、移住を拒み、住み続ける人も出てきた。彼らに対して、金で発言権を買った代表者たちが出した結論は、追放しない代わりに、代表者に管理させるというものだった。特徴的なのは、管理の仕方を問わなかった点だ」

「暴力を認めたんですか？」

「結果的に暴力による支配が始まったが、決定当初は多数決など、平等なやり方で代表者が決められていた。河川にある無法地帯では、今でも平等を守っている。しかし、駅裏など利用価値の高い地域では、外部から進出した人びとが争いを初め、武力闘争が始まった。やがて暴力が支配する暗黒街へと変わっていった。"表の世界のルールが通用しない場所"という意味で、"無法地帯"と呼ばれるようになった。支配体制が確立されると、町は組織化され、独自の文化を形成するようになった。江戸時代の遊郭のような世界を作り出す無法地帯もあった。そこでは女性が商品として悪用されていた」

老人は少年に本を開いて見せた。少年が覗きこむと、着物姿の女性が写っていた。

「性が商品化されたことで、無法地帯で生まれた子どもが社会問題化した。"自ら無法地帯に入った大人はいいが、無法地帯で生まれた子どもは選択肢がなくてかわいそうだ"という世論が強まった。そこで、子どもが誕生したら、届け出なければならなくなった。どこで生まれても、13歳になったら入寮して、自ら運命を切り開くチャンスを与えることにしたんだ」

「うまくいったんですか？」

「いいや。ルールが決まっても、働き手として利用するため、子隠しが後を絶たなかった。そこで、3月になると13歳になる子どもを探すため、無法地帯に捜索が入るようになった。当然、子どもたちは厳重に隠される。警察とのいたちごっこが続いた」

「誰も発見されなかったんですか？」

「いや、マザーは捜索で発見された子どもだ。マザーの母が、自分の子どもを自由にするため、命をかけて申し出たんだ。警察に保護されたマザーは、入寮が認められて、給食係として働くことになった。読み書きそろばんは、商売に必要なので独学で覚えていた。しかし、初めて受ける授業の内容はさっぱりわからず、追いつくのに苦労したという」

「一人でゼロから学んだんですか？」

「友だちに教えてもらったそうだよ」

「人気者だったんですね」

「ああ、マザーは若いころから人望があった」

「それからどうなったんですか？」

「勉強に慣れてしまうと、マザーにとって寮の暮らしは楽なものだった。無法地帯で宿屋の手伝いをしていたマザーは、いつも何十人分もの洗濯物や食事の世話を任されていた。朝から晩まで働きづめだったそうだよ。誰からも何も強制されなくなったマザーは、心から自由を愛した。しかし手に入れた自由は、母の犠牲の上に成り立っていることが、マザーの心に重くのしかかっていた」

「マザーのお母さんはどうなったんですか？」

「マザーを逃がしたことで制裁を加えられ、亡くなったといううわさもあるが、本当のところは分からない。わたしたちは離れていてもネットで交流できるが、無法地帯にいるマザーの母にはそんな自由はないからね」

「マザーはどうなったんですか？」

「無事に卒寮した。給食係の経験を生かして、工場の食堂に就職も決まった」

「占い師じゃなくて？」

「占いは初めマザー一人の趣味だった。友だちに頼まれて占ううちに、"当たる"と評判になって、占い師として独立することになったそうだ。占いを通じて著名人と知り合いになったマザーは、財産と名誉を手に入れた。東京の一等地に店を構え、何不自由ない暮らしを楽しんでいた。ところが、53歳の時、突然全てを売り払い、生まれ故郷の博多の無法地帯に帰った。母への思いが忘れられなかったそうだよ」

「争い合っている町に戻って、大丈夫だったんですか？」

「ああ、マザーのお客たちが、"マザーに手だしすれば報復する"と宣言したんだ」

「宣言だけでうまくいったんですか？」

「マザー自身の魅力もあって、数年もすると無法地帯の代表者の座についた。代表者になったマザーが最初にしたのは、客をもてなすための水炊き屋の開業だった。続いて、遠方からの客を泊めるため、宿屋も開いた。どちらも大繁盛して、いつしか愛情でつながる特別な地域として、世界中から人びとが集まるようになった」

「そこへ、二人で泊まりに行ったんですね？」

「そうだ。わたしと妻は、運よくマザーに会うことができた。妻が料理人であることを知って、厨房まで見せてもらった。それから毎年、お土産を持って、マザーに会いに行くことが大切な行事になった。マザーはわたしたち夫婦を我が子のように可愛がってくれたよ」

「司書さんにとっても、マザーは特別な人になったんですね」

「そうだ。妻はマザーが死ぬ1年前に秘伝を受け継ぎ、資金を出してもらって、横浜で水炊き屋を開店した。資金提供の条件は、博多で働いていたマザーの弟子を一人前に育てて独立させることだった。妻はマザーとの約束を守り、弟子を育て上げた。彼は横浜に留まって、妻の店を継いでいる。わたしたち夫婦には子どもがいなかったから、彼が子どものような存在だった」

「マザーが経営していた無法地帯のお店はどうなったんですか？」

「利用価値が高い地域だけに、外部からの干渉を恐れたマザーの希望で閉鎖された」

「働いていた人たちはどうしたんですか？」

「退職金を与えられ、自由区に移り住んだ」

「それじゃ奥さんのお店以外、何も残ってないんですね」

「そうだ。マザーの味を求めて訪れた人の中には、妻が大ファンだった音楽家もいた。横浜公演の打ち上げで、妻の店を使ってくれたんだ」

「奥さん、すごく喜んだでしょう」

「その日、妻の両親も保護区から来ていて、本当に特別な一日になったそうだよ」

「期待を裏切ったこと、両親は許してくれたんですか？」

「ああ、娘の成功を心から祝ってくれたよ。わたしたちの結婚も祝福してくれた」

老人は喜びに頬を染め、微笑んだ。

「保護区に来る前は どうだったんですか？」

少年は老人に訪ねた。

「6年前、わたしが57歳の年に、妻を53歳の若さで亡くした。死因はくも膜下出血だった。妻は体に異変を感じていたのかもしれないが、わたしには何も言わなかった。相当辛かったのかもしれない。そう思うと今でもなぜ気づいてやれなかったのか、後悔が残るよ」

「僕は幸せだったと思いますよ。だってすごく愛されているから」

「ありがとう。確かにわたしは妻を深く愛していた。妻からも愛されていた」

「僕もそんな夫婦になりたいと思います」

「お前さんにもきっと素敵な出会いが待っているさ」

少年は恥ずかしそうにうつむいた。

「恥ずかしがることはないさ。わたしなんていつも、妻の話ばかりするとお母さん連中からからかわれている」

「はい、でも、僕にも奥さんが現れるんでしょうか？」

「絶対とは言えない。結婚しない人もいるからね。でも心配症のお前さんには伴侶が必要だと思う。ただ、深く愛せば愛するほど、別れる時は辛い」

老人は胸に手を当てた。

「妻を亡くした当初は、胸が痛くて何もする気が起きなかった。保護区行きの話がでて、図書室整備に打ち込めば悲しみから立ち直れると思ったが、何をしても妻のことを思い出して手が止まってしまう」

「でも今は立派に勤めています」

「高村光太郎さんの詩集と出会ったんだ」

老人は鞆から本を取り出した。表紙には「智恵子抄」と書かれている。

「なんせ、館長になったんだ。57にして初めての経験ばかりで戸惑ったよ。以前は料理専門の図書館だったから、利用者は料理関係の人が多かった。しかし、今度はさまざまな年齢や職業の人が相手だ。どうまとめればいいのか、答えが見つからなかった。気持ちばかり焦って、何もはかどらない。そんな日が何日も続いた。失望されているのではないか。そんな考えが頭をよぎった。最後には何もかもどうでもよくなってしまったんだ。図書室なんてなくても何不自由なく幸せに暮らしている。そんな風を感じられた」

「片づけるのをやめてしまったんですか？」

「いや、日本十進分類法に従って、機械的に分類することに没頭したんだ。朝早くから夜遅くまで、ずっと図書室で過ごした」

「体は大丈夫だったんですか？」

「ああ、なんともなかった。妻の後を追うことができない、頑丈な体が憎くさえあった」

「でもみんな心配したでしょう？」

「その通り。図書室から出てこないわたしを心配して、お母さん連中がお茶会に誘ってくれた

んだ。そこで、ネットで詩を発表している母親と出会った。彼女は、妻との思い出を語るわたしに、高村光太郎に似ているとあって、この本をくれた。高村光太郎が詩人であることは知っていたが、詩集を読んだことはなかった。しかし、似ているという彼女の言葉に興味を持ち、本を開いた。読み始めて、こんなにも妻を愛した人がいたのかと感動したね。妻を亡くした悲しみを共有できた気がした。読み終わった時、本の力を改めて実感した」

「元気を取り戻したんですか？」

「そうだ。村人に希望を聞いて、誰もが使いやすい図書館にする意欲が湧いてきた。遺品だけでは不十分だったから、古本屋を探したり、昔の仕事仲間を頼ったりして、体系的に学ぶことができるように少しずつ本を揃えることにした。区長に交渉して、そのための予算もつけてもらった。レファレンスの依頼にも積極的に答えた。彼女に頼んで、詩の教室も開いた。わたしも彼女の生徒だ」

「うまく行ってよかったですね」

「ああ、さまざまなサービスを提供して、使いやすい図書館になることを目指した。なんとか成功して、近隣の村からも声がかかった」

「僕の村にも図書室ができて、とっても嬉しかったです」

「そういってくれと、わたしも引き受けた甲斐があった」

老人は少年の隣に座ると、山と積まれた本を整えた。

「これだけの本を一度に読むのは難しい。しかし、興味があるなら、リストをつくってあげよう」

「はい、お願いします」

老人は紙に本のタイトルと作者などをメモし始めた。

「卒寮さえしていれば、誰でも保護区に入ることができる。しかし、国土を保護するという目的があるため、仕事ができなければ入ることはできない。ずっと住んできた人が働けなくなっても追い出されることはないが、働けなくなってから保護区に入ることにはできない。だから多くの人は、新しいことに挑戦する元気がある40代のうちに保護区に戻る。わたしたちは、妻が横浜で店を開いていたから、自由区で一生を終えるつもりでいた。ところが、妻はなくなり、こうしてお前さんとここで話をしている」

「いろいろありがとうございました」

「どういたしまして。わたしのこれまでの経験を通して、自由区がどんなところか想像できるようになったかね？」

「いいえ、分かりません。もっと知識や経験を増やさなければ、分からないのだと思います。だから今は、今できることをするしかない」

「正論だな。疑うより信じることだ」

「はい。朝早くから押しかけちゃってすいません」

「いいさ。それより、一緒にレファレンスに答えてみないか？」

「いいんですか？」

「もちろんいいとも。手伝ってくればわたしも助かる。お前さんの役にも立つ」

「はい、お願いします」

「そのかわりといっっては何だが、今日話したことはまだお前さんには教えてはならないことが多い。ここで聞いたことはすべて内緒にしてくれないか？」

「はい。誰にも言いません。二人だけの秘密です」

「お前さんを信じよう。さあ、こちらへ来てごらん」

老人は、自分用の机に少年を座らせた。

あとがき

いろいろ考えすぎて、何が始まりだったのか忘れてしまったので、思い出すためにもう一度整理してみよう。

<1人1個必要な場合>

生産力が高いケース

平等：100個あるものを、10人で10個ずつ分ける。

余剰：10個ずつ配って、残り90個は売ったり、保存したり、公共事業として使用する。

減産：働きすぎなので、生産量を減らす。

競争：100個あるものを、最初に勝った人が50個取って、2位3人が15個ずつ取って、残り5個を6人で分ける。

貧困：足りない6人は、借金をすることになる。

福祉：放置できない問題なので、1個以上持っている人から徴収して、配り直す。

累進課税：たとえば、

「50個ある人からは半分の25個、15個ある人からは、7個」を集め、

「0.83の6人に、0.17」ずつ配る。

余った分は、公共事業として使用する。

自己申告：欠点は、収入を明らかにしなければならないこと。

生産力が低いケース

10人が100人になったら？

食べるだけで精一杯で、他のことに費やす余裕がない。

100人で100個だから、一つでも欠ければ誰かが死ぬことになる。

あるいは、全員が不足状態になる。

10人が1000人になったら？

1000人で100個しか作れないなら、一人0.1個になる。

平等に配れば、全員死んでしまう。

100人を選んで、900人を見捨てるのか。

死を覚悟の上で、全員平等に配るのか。

なにを選んでも問題が起きる。

必然的に競争が起きて、勝った人が生き残るだろう。

その結果、10人しか残らないかもしれない。

食料不足より戦闘で死ぬ人の方が多い。

<余るという問題>

「ギリギリ、足りない」で問われるのは「配り方」ではなく「生産量の低さ」。
だから「配り方」で対立しても、「生産力を高めること」で合意できた。

では、「余る」で問われるのは何か？

1年で、1人1個必要なものを、1人で10個作れる場合、残り9個は余分になる。
米の場合、

- 扶養家族を持つことができる。
- 凶作に備えて保存することができる。
- 米以外のものと交換することができる。

米が不足している間は、通貨としての役割を果たしてくれる。

古米を食べて、新米を残すことで、資産になった。

米が余っている現代では、古米は資産にならない。

なぜなら、新米を買って食べているから、古米の買い手がいない。

「作っても売れない＝余る」という問題に対して、「減反・転作」という政策をとってきた。

国内だけでなく、海外との競争もある。

安さだけでは売りにならない。

美味しさや安全など、ブランド力が求められる。

それでもやっぱり「余る」場合、作った人はどうなるのか？

「収入がない」という状況に陥るだろう。

米は管理されているので、「余る＝収入ゼロ」とはならない。

しかし、管理されていないものの場合、「余る＝収入ゼロ」は深刻な問題となる。

<争点の推移>

かつては、「食料生産力＝人口」という関係にあった。

生産力が高まれば、餓死しないから、人口が増える。

食料生産以外の職業に就く人が増える。

今は、食料生産力が増えても、人口が増えることはない。

むしろ減少している。

日本という国自体、工業・サービス業で収入を得て、食料を買って食べている。

長所は、大儲けが可能なこと。

欠点は、儲けがなくなれば、輸入が途絶えて食べられなくなること。

大量生産で、全員にいきわたるようになった。

品質も上がった。

価格も下がった。

物質的に豊かになった。

その先に待っているのはなにか？

1個以下なら、1個にすることが求められる。

作れば売れる。

原料の入手が問われる。

1個以上なら、品質が問われる。

より良いものを作れば売れる。

技術力が問われる。

高品質が保障されれば、安さが求められる。

より良いものをより安く作れば売れる。

生産体制が問われる。

無駄を省き、人件費を抑えることが求められる。

良いものが安く大量にできれば、「売れ残り」が問題になる。

生産量の増加は、喜ばしいことなのに不幸になる。

競争させて収入ゼロを許すのか？

管理して平等に仕事と収入を配分するのか？

問われているのは、「生産力が高くなりすぎたこと」をどうすれば解消するのか。

国外に工場を建てて、国外に市場を求めても、「売れない」という問題は消えない。

しかし、当面は

コストの安い国で大量に生産する。

市場を求めて海外に進出する。

で解決しようとするだろう。

<出発点>

生産力が高まりすぎた世界では、生産するより、売り込む方が難しい。

もし「確実に消費する集団」を作ったら？

必要なだけ、計画的に生産することができる。

同じものを大量に作れるので、大量生産の利点も生かすことができる。

「選択の自由」が犠牲になる。

しかし、選択肢の狭い地域を対象にすれば、問題にはならないかもしれない。

問題は、誰が消費し、生産するのか？

「国土を保護する山間部の人びとが消費し、中学生が生産の中心となる」が「2173年、日本」の出発点。

中学生自身も消費者に含まれる。

自分たちが使うものを、自分たちで作し、交換する。

自給自足のためのネットワークを構築する。

<理由>

どうして山間部に人を配置し、中学生に工場体験をさせることにしたのか？

根拠が曖昧だから、書いていて詰まるのだと思う。

内容が二転三転する。

一番の問題は、保護区の規模を決めてないこと。

国土を保護する人たちに限定するなら、失業者や働けなくなった人を含めることはできない。セーフティネットの役割を求めるなら、誰でも入れるようにしなければ意味がない。

どちらにするのか？

「2173年、日本 レファレンス」では、誰でも受け入れる方で書いている。

では、大不況で倒産が相次ぎ、緊急を要する申請が急激に増えたら？

許容量を超えて受け入れるのか？

新たに開拓するのか？

何を選んでも、セーフティネットとしての価値を問われることになる。

保護区を舞台にするなら、この問題を書くべきなのではないか？

だから、最初は没にして書き直そうと思ったけれど、少年の不安と一緒にできそうにないので、これはこれで公開することにしました。

保護区や無法地帯の成り立ちが、今のままでよいのか迷うところ。